

INTERVIEW WITH 山形 辰史 教授



私たち Q チームは、新型コロナウイルスの流行に伴い、対面授業からオンライン授業に移行したことで、ゼミを履修しようとする2年生や3年生がゼミの先生を選ぶことや、先生と学生を繋ぐことは今までよりも非常に難しくなっていると感じています。このプロジェクトでは、ゼミの教員と学生の両方の視点に注目し、ゼミについての基本的な情報やゼミ選びにおいて参考になる情報をリレー形式でお伝えしようと思います。

インタビュー記事では、APUの教授2名（APS教授、APM教授）とそのゼミ、そして各ゼミ生の声をお届けします。学生の意見も取り入れることで先生方の教授法などを知っていただくだけでなく、実際にゼミを受講されている学生の意見も知っていただきたいと考えています。

I. 基本情報

山形 辰史(やまがた たつふみ)教授
岩手県出身、ロchester大学（経済学博士、米国）、慶應義塾大学。
専門は国際開発・国際協力。趣味はバスケットボールをすること。

II. 山形ゼミに関するQ&A

2018年10月にゼミを開講したものの、ゼミ生が集まらず挫折。ところが1年後、田場太基さんからゼミをやってほしいと強く希望されたことがきっかけでゼミが再始動することとなり、現在で1年半ほどになる。まずは、そのゼミに関する『Q』uestionに答えていただきました。

1. ゼミの特徴について教えてください。

専門は国際開発・国際協力だが、自身の研究分野にこだわることなくゼミ生が学びたいことに焦点を当てているので、田場さんの「障害学」や他の学生の「ジェンダー研究」をはじめ、研究テーマの多様性に富んだゼミであることが特徴です。

2. 山形教授のゼミ形態について教えてください。
今は個人ワークが主ですが、「混ぜる場」としてグループワークを設けたいと考えています。グループワークがなくても交流を深めているゼミ生もいるようですが。私としては、誰が上手くいっていないか、誰が上手くいっているのかを見ておくことは大切だと思います。

3. ゼミを受講する3つのメリットについて教えてください。
「学生に指導教官がつくこと」、「教授との直接のコミュニケーションが取りやすいこと」、「同じ趣味を持つ仲間を見つかることができること」です。

4. ゼミ生の研究テーマで最も印象に残っているものは何ですか。
特にゼミ生の研究に貢献できたという意味では、「JR九州が一部駅を無人化することの車椅子利用者への影響」と「大分県での同性パートナーシップ制度の進捗状況」が印象的でした。どちらもたまたま「国際開発」の範囲には入っていない。でも、いいんです。卒業後も興味を持ち続けられるようなテーマを選ぶのは自由だと思います。

III. 山形ゼミでの指導に関するQ&A

ゼミ生の研究テーマは十人十色。この多様性に富んだゼミで山形教授はどのように指導されているのでしょうか。

5. ゼミの指導として大切にしていることは何ですか。
ゼミ生は、自分が気になって仕方がないことを見つけて、それについて研究を重ねること。そして、卒業後もそれに興味を持ち続けてほしいと思っています。ゼミを通して、そういった大きなテーマに出逢ってほしいですね。そのために、卒業論文を書くことを



山形先生の研究室にて、コロナ以降初の対面でのプロジェクトQのインタビュー。

第一の目的とせず、卒業して将来何をするかに焦点を当ててゼミで研究してほしいと考えています。

6. ゼミで使っている三つの教授法について詳しく教えてください。
私のゼミにおける三つの教授法は、「目的変数(量的変数でなくても、質的側面でも可)の発見」、「目的変数のばらつき確認(例えば、良い事例・実践と悪い事例・実践の発見)」、「ばらつき決定要因の発見」です。

7. 学生が研究論文を書くときに、どのような方法で指導・手助けをしていますか。
研究していくなかで、他の人が研究したこと、本人が自分で行ったことを完全に区別することの重要性は、強調して伝えていることですね。

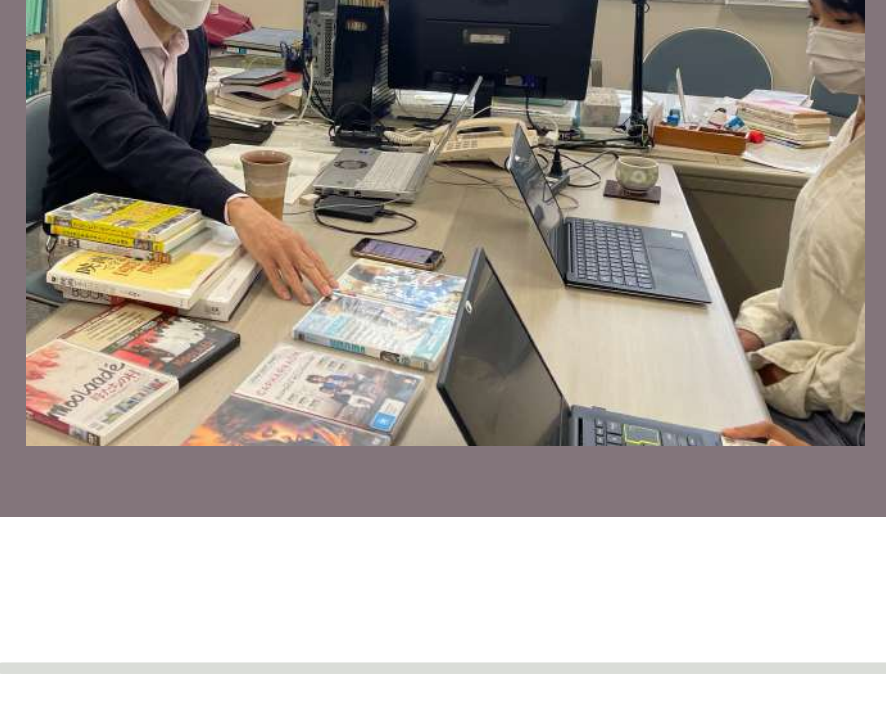
8. ゼミでより専門的な研究を行うために重要視していることは何ですか。
ここまででも述べてきたように、あるトピックに強い興味を持つこと、ですね。そして仮に応用分野(国際開発研究等)について大学院で研究したい人は**社会人経験があった方が良いでしょう**。意見をまとめる合意形成のプロセスや業務の役割分担などを学ぶために、社会での経験は大切ですね。

IV. 教授自身の研究と将来のゼミ生に向けたアドバイス Q&A

最後に山形教授ご自身のこれまでの研究について、そして、将来、山形ゼミで研究するゼミ生に向けてアドバイスとなる『Q』uestionに答えていただきました。

9. 山形教授が最初に研究したテーマは何でしたか。
大学2年生の時の「人口抑制の必要性と人口抑制政策の妥当性について」でした。ですが、人口を抑制するのではなく、開発を進めて人間が生活できるように発展していくことが必要だと気付いたんです。これがきっかけで、人口経済学から開発経済学の研究へシフトすることになりました。

10. 山形教授は、今後はどのような研究テーマに興味がありますか。
興味がある分野としては、開発途上国における雇用、健康、障害、貧困、男女平等と様々です。今後は



山形教授が学生に勧める書籍と映画

研究発表よりも、**社会に対して発言することを特に大切にしよう**と思います。

11. 研究のために日頃から行っていることや心掛けていることはありますか。
様々な**イメージを膨らませるために映画や小説によく触れています**。出口学長も言うように「旅すること」も重要ですが、映画や本に触れることは旅することの疑似体験だと思います。そのようなことが**学びの動機づけになることもあるので重要**だと思います。

12. ゼミの面接のために準備しておくべきことはありますか。
自分が何をしたいのかを自問自答することが大切です。加えて、私としては、ゼミに入ることを希望する学生が多い場合は、メインゼミでの履修を希望する学生を優先しています。また、私自身がどれだけその学生の研究分野において力になれるかどうかを重視しています。



山形教授とQメンバーの柴田彩葉とロレッンジ・ケリー

インタビューの感想

田場さんのインタビューで山形教授のことを伺った上で臨んだ山形教授のインタビューでしたが、山形教授の生徒に対する指導、教授中での学びに対する考え方や姿勢は非常に惹かれるものでした。田場さんがおっしゃっていた通り、「この先生の元で学びたい。」と思ってしまいました。「十人十色の山形ゼミ」。こんなにも十人十色なゼミは山形先生だからこそできる学びの場であると感じました。「気になって仕方がないこと」を私自身も見つけて、それについて研究が重ねられるよう頑張りたいと思います。

インタビュアー & ライター



名前:柴田彩葉
学部:APS
出身:日本
メッセージ:日本 皆さん、こんにちは!2021年秋からALRCSでQ-teamメンバーとして活動している柴田彩葉です。趣味は音楽を聴くこと、デザインをみることです。ProjectQに参加したことで、APUでの学びについて教授や先輩である学生の視点から知ることができ、私自身の学びを一層深めたいという思いが強まりました。今後もインタビューで知り、感じたゼミの魅力について学生の皆さんにお伝えしたいと思います!

インタビュアー

名前:ロレッンジ・ケリー
学部:APS (ED)
出身:マーシャル諸島
メッセージ:ヤッコエ(こんにちは)!
3回生で環境・開発専攻のケリーと申します。旅行とウクレレを引くことが大好きです。私たちの記事を読むことにより、読者みなさんが先生方が教えてくださった教授法の中から、大切な知識を得られることを願っています。



「Q」とは

APUで素晴らしい授業を行っている先生方はたくさんいらっしゃいますが、先生方が授業中にどのような工夫をしているのかがわかることが出来れば、他の先生の授業改善にも役立つ。そのために、インタビューをして記事の工夫を教えてくださいたい、という考えで、質を高めるための「Question=問」に答える、授業改善の「Queue=質」を高める、質を高めるための「Question=問」に答える、授業改善の「Queue=質」をなす、など、色々な意味を込めて「Q」と名付けました。先生方の授業の質向上の「Quest」に役立てられると幸いです。